

ポストコロニアル状況

サンドロ・メツァードラ*+フェデリコ・ラオーラ** (北川 眞也***訳)

Mezzadra, S., F. Rahola 2008, "La condizione postcoloniale", In S. Mezzadra, La condizione postcoloniale: Storia e politica nel presente globale, ombre corte, Verona, pp. 23-38.

(…) 秘密の歴史

それは並行する歴史のこと

そこは私たちの冬が春へと変わりゆく場所

ジャンフランコ・マンフレディ「世界中のゾンビたちよ、団結せよ」(1977)

1 これは「グローバル」なスタイルか？

私たちの時代は、肯定的なかたちでは定義できない時代のように思われる。そう、それは「ポスト」の時代なのだ。ポストモダン、ポスト歴史、ポストフォード主義。そして、今では大西洋を越えたところでも執拗に唱えられている決まり文句。ポストコロニアルだ。決して完遂することのない「ポスト」への移行こそが、現在を際立たせる数々の特徴を把握するための唯一の模型のようにみえる。一見すると、ポストコロニアルという言説は、ただこのような難しい状況を反映しているにすぎないようにも思われる。さしあたり、「ポストコロニアルの「ポスト」の意味とは何か」という問いをめぐって繰り返されてきた議論を棚上げにしておこう。実際のところ、理論をめぐる議論や「グローバル」な規模の公的課題のなかでますます広がりを見せるこの言葉の変形模様をみてみても、感動するようなものはほとんどないのだ。要するに、ファノンによって巧みに定義された、植民地の空間・時間・経験を組織化していた二項対立の時代は、すべてのものが交差し「異種混淆」する時代に後を引き継がれたようなのである。この段においては、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の最後にある記憶に残るページのなかで、マックス・ウェーバーが語っていたものとは逆の運動が引き起こされているようである。すなわち、多くの人が繰り返しているように、植民地専制主義の「鉄の檻」は、「いつでも脱ぐこ

とのできる薄い外衣」¹⁾へ姿を変えてしまったということである。一連の転位 *dislocazioni* が、世界を絶対的内在性の領野へと変容させてきたのかもしれない。その領野を、皮肉という方向に進んでいくかたちで、色調変化に富んだアイデンティティを再組成している諸々のノマドの主体が走り抜けているのだ。こうした転位は、時に不要になった植民地の古いスーパーマーケットの倉庫の中から、また時には数々の反植民地闘争の記憶の中から様々な断片を取り出している。こうしたかたちで、若者文化によって、また同じように数多の大企業によっても押し進められながら、混血することが地球規模のスタイル、つまりはグローバルなスタイルとなりはじめていくのである。建築家たちやレストランのメニューにとって、そして同じようにファッション・デザイナーたちにとっても、混血化はグローバルなスタイルとなりはじめていくのだ。

今一度、私たちは「弱い思想」に対峙しているということなのだろうか？ 1990年代のうちにアングロサクソン世界ですさまじい広まりをみせた後に、イタリアへも入り込みはじめていくポストコロニアルの研究群が私たちにもたらしているのは、ただ現在を弁護するだけの議論であり、そのもう何度目かわからないほどの変形模様のことなのだろうか？ こうした疑念が、ポストコロニアリズムというカテゴリーに対して仕掛けられた激しくかつ詳細な3つの重要な批判によって提出されてきた（その概要としては Chrisman, Parry, a cura di, 2000）。

* ボローニャ大学

** ジェノヴァ大学

*** 大阪市立大学 COE 特別研究員

1つ目の批判は、とりわけアリフ・ダーリック (Dirlik 1997 e 2000) が主張してきたことである。それは、ポストコロニアル研究がある種の永遠のポストモダンな現在のなかへと、歴史の地層と不透明さといっしょに歴史そのものを真に溶解させることを助長しているというものである。それゆえに、過去の諸々の革命の中断を陳腐化し、未来では革命が不可能であることを確定してしまっているのである。2つ目は、マイケル・ハートとトニ・ネグリ (Hardt e Negri 2000) がより洗練されたやり方で強調したことである。それは、多くのポストコロニアル理論家たちによって解放の経験として称賛されていること、まさしく異種混淆や混血化というのは、現実には現代における支配と搾取の諸々の装置が作動する領域のことを意味しているというものである。3つ目は、スラヴォイ・ジジェクがポストコロニアリズムに関する数多くの発言の中で指摘してきたことである。この指摘は、近年ピーター・ホールワード (Hallward 2001) の広範囲に渡る分析によってより確証されている。ジジェクはポストコロニアリズムを単に多文化主義がグローバルな規模で投影されたものとみなしているが、彼はその中に私たちが無差異と呼びうる論理が作動していることを指摘している。すなわち、ポストコロニアル研究では、一人称で物語る権利は他者のアイデンティティから剥ぎ取られた後から、その他者へと付与されることになるのだ。その他者というのは、承認によってではなく、ただ真理の偏向的次元を「レーニン主義」的に征服することによってのみ、縫合されうるアイデンティティ、アイデンティティを構成している傷口のことなのである (Žižek 2002 参照)。

もちろん、個々のポストコロニアル研究は、それぞれが有する長所にしたがって評価されるべきである。だが上述の3つの批判の妥当性に加えて、この論文の冒頭にポストコロニアルな「スタイル」として概略を描いた通りの特性を裏付けてしまう著者や理論潮流は容易に見つけられるだろう。しかしながら、もしポストコロニア状況を真剣に受け止めるならば物事は変わる。少なくとも取りかかりにおいて、ポストコロニアル状況をポストコロニアリズムから区別すること。ポストコロニアリズムを、私たちの現在の輪郭を批判的に再構築することを可能にするイメージ、概念、言葉が堆積したフォーコー流の古文書としてみなすこと。こうするなら、ここで言及してきた批判の内容を部分的にでも埋め合わせることができるのである。また、にもかかわらず、これが批判的思考の語彙における非常に重要な位置

へ、「ポストコロニアル」という用語を差し挟める好機であることも強調できるのである。

この観点からすれば、「ポストコロニアルの「ポスト」の意味」が決定的なものとなる。ここですぐさま、私たちのテーゼを明確にきっぱりと表現するのがよいだろう。それは、ポストコロニアルな時代とは、植民地経験が過去へと引き渡されるように見えると同時に、まさにその「克服」が成し遂げられる方法のために、支配とそれを際立たせる不服従の所産とともに、それが現代の社会経験の中央へと据え付けられる時代であるというテーゼだ。西洋による植民地の搾取というプロジェクトの真の「認識論的」暗号であった閉じ込め *confinamento*²⁾ と、それに抗った抵抗は、はっきりとしたやり方で植民地からメトロポールを区別できるような地図学を組織立てるのをやめている。今では、閉じ込めとそれへの抵抗自体が粉々に砕け散り、グローバルなスケールで止むことなく自らを再構成しているのである。ポストコロニアルというこのカテゴリーが提起していることは、世界の統一性、つまり数多くのコスモポリタンな企図が追いかけてきた目的が、最終的には両義性を孕んだかたちで様々に実現されてきたということなのである。つまり一方では、これらの両義的なかたちはその内部で個々のアイデンティティ自体が刻み付けられてゆく物質的地平を形成している。³⁾ だが他方で、次のことを否定するための保証は何一つとして与えてくれはしない。それは、そこで言われている世界の統一性というのが、普遍的なものの言語で表明された政治的言説の解放の力が使い果たされてしまう場であるかもしれないこと、商品と貨幣の亡霊の客体性によって吸収されてしまう場であるかもしれないということだ。

2 「グローバル」を脱中心化する

さて、ポストコロニアリズムと歴史との関係からはじめよう。多くの批判者によると、それは、ポストコロニアリズムのアキレス腱の1つを構成しているのである⁴⁾。私たちの観点からすれば、ポストコロニアル研究という大きな実験室の内部では、歴史研究 (インドに関しては、いわゆるサバルタン・スタディーズ *subaltern studies* によって進められた集団作業が考えられる) は、実際には重要な役割を果たしてきたのである。とりわけ、反植民地主義とポストコロニアリズムの間にある溶解不可能なつながりを白日の下に曝してきたのは、こうした歴史研

究なのだ。ロバート・ヤング (Young 2001) は最近、このつながりに一冊の本を充てた。ヤングは第三世界主義といういつも通りのレトリックの外部で、反植民地思想のいくつかの古典を再読できるようにしてくれている。ヤングはこれらの古典のなかに、あるひとつの自覚が芽生えはじめていたことを示す数々の痕跡の存在を認めている。その自覚というのは、植民地主義と反植民地主義の間の弁証法が過去4世紀の間展開してきた場所である数々の伝統的な境界からはあふれ出すようになってきたという自覚である。ポール・ギルロイ (Gilroy 1993) の『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』のような本は、近代性の植民地という実験室のなかで展開してきた黒人の「二重意識」が有する離散的かつグローバルな次元を強調することで、歴史的眺望を脱中心化させるまた別のまばゆい一例をこしらえている。

征服すべき海外の領域が尽きてしまったと思われたとたんにヨーロッパを殴打するようになった植民地主義のひとつのかたちを、ファシズムのなかに見て取るよう1955年にエメ・セゼールが促していた際の確信は、おそらくこの意味合いをはっきりと示している指摘なのではないだろうか？ しかし、ロビン・ケリーが最近指摘したように (Kelley 2002: 175)、セゼールはもっと向こう側へと進んでいたのだ。というのは、ナチズムとファシズムによって破られた真のタブーは、ただ植民地世界においてのみ理解可能であったものを、白人であるヨーロッパの数多の主体に直接適用することにあるとセゼールは主張していたからである⁵⁾。この議論の筋道、偉大なる知識人であり活動家でもあったアフリカ系アメリカ人のW.E.B デュボイスによって終戦後すぐの時期にすでに述べられていたこの議論⁶⁾の筋道にしたがった末に私たちの眼前に出現するものこそが、ポストコロニアリズムの有する禍々しい価値なのである。もともと植民地経験の文脈で育まれた支配の装置が、メトロポールの空間へと浸透するそのときには、私たちはすでに何らかのかたちでポストコロニアルな時代のなかにいるのだ。

この移行——全く解放的であるとは言えないこの異種混雑化の運動——が実際に近代植民地主義に植え付けられているものだというのは本当であろう。1979年の素晴らしい論文の中で、カルロ・ギンスブルグは指紋押印がインドのベンガル地方にその起源を有するという点に関連して、このことを効果的に説明した⁷⁾。しかしながら、この場合は、メトロポールと植民地の間の境界は、国内にある基礎的な境界

をよりよく管理するために横断されたのであった。その境界とは、19世紀後半のパリを取り上げたルイ・シュヴァリエ (Chevalier 1958) によって巧みに調査された「労働階級」と「危険な階級」との間の境界である。こうしたことは、機関銃についても少しあてはまる。機関銃はアメリカ市民戦争が進展するなかで、その破壊的なポテンシャルの有する致死力が確証された後に、「西洋」で繰り広げられる戦争からは放逐された。しかしながら、その理由はアフリカ分割 scramble for Africa のなかで機関銃が決定的な役割を果たすべく放逐されたというものであった。とはいえ、このことがアメリカ合衆国において機関銃が惜しみなく用いられるのを阻止することはなかった。ネイティブ・アメリカンに対する最後の戦闘に加えて、19世紀末の労働者たちの数々のストライキを抑圧するためにも機関銃は用いられたのである。そしてしまいにはそれが世界大戦の戦場で利用されたときには、その質の向上が決定的なまでになされたのであった。それはつまり、植民地事業のなかでヨーロッパ人によって長きに渡って実行されてきた「全体戦争」が、ヨーロッパ大陸自体の中へと広がりはじめていたということなのである (Diner 1999, 第1章参照)。それから少しして、また別の典型的に植民地的な支配の装置、強制収容所がこの転位の運動に悲劇の印を刻みつけることになるのである (Rahola 2003)。

そういうわけで、セゼールの言葉のおかげで、私たちはポストコロニアルな歴史の時間が有するある決定的な側面をはっきりと述べられるようになる。それは、数々の典型的に植民地的な支配の論理が、もともと起源を有した空間からあふれ、そして「メトロポール」を包囲するほどまでにあふれ出していくということによって特徴付けられるものである。このあふれ出す運動は、決して消尽してはいない。「西洋」生まれの市民権が含んでいる管理の機能を再編成するなかで、また同様に移民労働を統治し価値へと転化させる諸々の方法のなかで、この運動は多かれ少なかれ「破局的」な効果を生産し続けているのだ。しかしながらこれは、ポストコロニアリズム、すなわち一度反植民地主義とのつながりに強調点が置かれたポストコロニアリズムによって、私たちの現在の系譜学を定義する際にもたらされるただ1つの功績に過ぎないし、おそらくもっとも重要な功績というわけではないだろう。それとは別のもう1つの功績があるのだ。それは、数々の反植民地闘争が、闘争の直にグローバルな次元をもって、現代史のなかに刻んだ後戻り不可能な中断のもつ性質を

強調するということにある。これらの闘争によって生み出されたすべての政治体制は、実際には明白な敗北を経験した。だがそれにもかかわらず、私たちが生きる時代を完全にポストコロニアルなものとして特徴付けるのは、これらの闘争なのだ。なぜならそれらこそが、植民地の時空がメトロポールの時空とは質的に異なっているという着想の持つ論理を瓦解させてきたからである。

1961年にファノンが、『地に呪われた者』の記憶に残るページの中で（本書第2章参照）、反植民地蜂起の原動力としての平等の発見について語っていた。これは、「ネオリベラルなグローバル化」がそのヘゲモニーを拡大する以前に、植民地状況の「分割された世界」を覆し、*世界の統一性*を物質的に構築し想像してきた一連の過程が有した主体的な側面を指摘するための素晴らしいメタファーである。私たちの観点からすれば、現代のグローバル化の水準でも、この平等の発見が持続していること、この発見が浸食過程のように活動し続けているということ、これを断言する場合のみ、ポストコロニアル状況について語るができるようになる。私たちは別なところで、次のようなテーゼを論じ立ててきた。それは、数多の移民の移動のなかには、この平等の発見がもたらした両義的な数々の痕跡が内包されているというテーゼである（Mezzadra 2006, 特に第1部第4章参照）。また私たちはこう確信している。平等の発見が、かつて「第三世界」として定義されていた場所のなかに新しいタイプの社会運動を育み続けているということ。これらの社会運動は、歴史的敗北、すなわち反植民地闘争自体から生まれてきた数多の運動が被ってきた歴史的敗北の地平線の向こう側へと、自覚的に身を置くことのできる能力を有しているのだ。

私たちが関心を寄せるのは、こうした切り口と調和するポストコロニアル研究である。このタイプの研究というのは、グローバル化の時代の最中に、ファノンとルムンバ、C.L.R. ジェームスとブラック・マルクス主義の伝統を取り戻させてくれるものである。もちろん、そこにもう終わってしまった政治的行動と理論のモデルを見いだすためなどではない。そうではなくむしろ、数々の企図の失敗、つまりこれらのモデルを通して彼らの名が結びつけられてきた数々の企図の失敗のなかに、「勝者の歴史」によって隠され消去されてきた歴史の意味を突き止めるためなのである。テオドール・アドルノはかつて、ヴァルター・ベンヤミンとの終わりなき対決のなかで、歴史の知識は「勝利と敗北の不幸な連鎖」を越える

必要があるし、むしろ「こうした力学に組み込まれないで置きざりになったもの」にこそ注意を向けなければならないと強調したことがある。私たちが反植民地的企図のなかに潜り込んで、回復させなければならないポストコロニアルな遺産を作り上げているものは、まさにこれである。つまり、「弁証法の網にかからなかった落ちこぼれや盲点の類」（Adorno 1951, p. 178）なのである。

3 移行について

とはいっても、問いは存続したままである。なぜ植民地の時間が私たちを悩ませ続けているというのだろうか？ なぜこの時間を克服したということ、すでに既成事実でもあると同時に、実際には不可能な事実である移行というものも暗示しているのだろうか？ 現在と植民地主義の間の連続性を告げる数多の要素については、議論の余地がないように思われる。「アフガニスタン Afghanistan にて血みどろの死闘」。この風変わりなつづりが、それが今日の新聞から抜粋された見出しではないというヒントを与えている。それは、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』の最初のページからの引用なのである……。しかしながら、この連続性に対するこうした直感は、判断を誤らせてしまう危険を有している。たとえば、植民地主義が近代の地理とその無数の境界を物質的に描いてきた際の決然としたやり方ははっきりしている。その地理は、最初にヨーロッパの輪郭、それから「西洋」の輪郭を世界に投影することで、16世紀にはじまりが告げられたものである。その地理は、1885年にベルリンで「定規とコンパス」を用いて引かれたアフリカの数々の境界のなかに、おそらくもっとも完成された表現を見いだしているのである（ヘーゲルの言語で言うと、その概念を実現しているのである）。

これらの境界が今に至るまで引き続いて作用してきたことは、現在にのしかかっている多くの緊張と失敗の根源を理解するためには無視することはできない。一方で、その事実は諸々の反植民地運動が被ったまさしく敗北自体を説明する上で力を貸してくれる。というのは、これらの運動の政治的想像力が、植民地的言説の秩序の内部で展開することになってしまったからである。パルタ・チャタジー（Chatterjee 1986）が非常に重要なページで記述していた主題を再度取り上げれば、それは植民地的言説の秩序の中からナショナルな形態を引き出して

しまい、その国境を自ら内部化してしまったということなのである。他方で、近年行われてきた紛争、イスラエルとパレスチナの紛争にはじまり、そのすべてが厳密に「エスニック」な用語で定義されてきた「ローカルな戦争」（ルワンダ、東ティモール、スリランカ、シエラレオネ）にまで及ぶ、近年のもっとも重大かつ悲劇的な紛争を考察してみるなら、そこに植民地を生み出した際の原型が存在しているのは、反駁できないほどに明白であるよう思われる。

しかしながら、次のような事情を見逃すことはできない。それは、このようなかたちで現今の紛争を解説してしまうことは、まさしくその「エスニック」な性質を強調することで、*hic sunt leones* という昔の表現の原則がもつ正しさを繰り返しているようにみえてしまうということである。*hic sunt leones* とは、近代初期の地図のなかで野蛮人がいる領域を印付けていた表現のことなのである。別様に言えばこうだ。今一度、現在の虐殺とジェノサイドの責任を、ただ排他的にベルギーやフランスの植民地主義やイギリスの帝国主義へと帰してしまうことによって、「サバルタン」の側のあらゆる行為の可能性が除外されてしまい、中央の舞台に唯一の主演として据え付けられることになるのは帝國的主体性であるということだ。私たちに、現代の紛争についてのより政治的に生産的なイメージは次のようなものだと思う。それは、たとえ支配と搾取をもたらす数々の「垂直的」な線条が絶対的に存続していることを正しく重要視しながらも、支配と搾取からの解放を歴史的に目指してきた現実の諸々の企図の失敗がその線条のなかで果たしてきた両義的な役割を強調するということである。

実際のところ、過去との絶対的な連続性という論理を再生産してしまうことは、自己を放免する（サバルタン主体の場合）ものであろうと、清算するもの（「西洋的」主体の場合）であろうと、「贖罪」のメカニズムに裏付けを与え、それを果てしなく永続させてしまう印象がある。清算というのは、途切れることのない支配と搾取の歴史の直線的な筋立てのなかの単なる不適当なものとして、諸々の反植民地闘争をやっかい払いしてしまうからである。こうして、蜂起する植民地支配を受けた主体からは、反乱するサバルタンからは、行為体としてのあらゆる可能性が、歴史へ直接介入するあらゆる可能性が剥奪されるのである。他方で、自己を放免するというのは、植民者である西洋のなかには特定できないあらゆる「直接責任」を、すなわち西洋のものではないあらゆる革命的行動を、歴史そのものから取り除い

てしまうからである。こうすることで、責任ということ以上に、行為そのものを植民地化された主体から永遠の（新）植民地的主体の方へと移し替えてしまうのである。

したがって、この見通しにおいては、現在は植民地的過去の渦巻きのなかへと容赦なく呑み込まれてしまう。現在は、簡単に言うなら植民地的過去の再出現（新植民地主義 *neocolonialismo*）として、あるいは第一世界、第二世界、第三世界、第四世界を分割する境界にそって地理的に分極化した植民地的過去の変形模様として呑み込まれてしまうのである。植民地「以後」が有するポテンシャルは、クワメ・エンクルマがガーナ独立の翌日に主張していたように、「新植民地主義」のなかでこそ繰り返され、「再び」という鉄の論理に必然的に譲歩することになるのだ⁹⁾。すなわち、世界のすべての南をそれぞれの北へと縛り付ける「低開発」や「従属」の存続を前にして、このポテンシャルは太陽の光に照らされた雪のように溶けるのである。

本当に明瞭な概念であったために、新植民地主義・低開発・従属といった概念は、具体的なケースに関して記述する際の有用性を時折備えることもできた。しかし、こうした有用性とはまったく無関係なかたちで、アパルトヘイト終結後にアフリカ民族会議によって採り入れられたように、これらの概念は逆説的にも政治的レトリックとして機能していることが表面化している。これらの概念は、「開発」の必然性と確実性の名の下で、南アフリカ政府によって近年促進されてきた「ネオリベラル」な政策がもたらした破壊的な社会的影響を覆い隠し、これらの政策に抗する数々の並々ならぬ闘争を「反動的」としてスティグマ化することに力を貸してしまっているのだ。例えば『我々は貧者である』のなかでアシュウィン・デサイ（Desai 2002）によって述べられていたが、これらの闘争は、統治性の過程には全体として還元されえないということを示している。この点で、これらはチャタジーが近年「統治されるものの政治」と呼んだものの典型的な例として考えられるのだろう。

もっと一般的な物言いをしよう。ポストコロニアルリズムの「ポスト」は不可能なものであるとそれでも事細かに述べ立てる諸々の反対意見に対しては、こう反論できるだろう。こうしたやり方で話を進めていくと、反植民地主義の遺産と連続性を完全に見失ってしまうことになってしまうし、それゆえにまたその失敗、その「落ち度」が有する深い意味合いをも見失ってしまうのだと。ヴァルター・ベンヤミ

ンの『歴史哲学テーゼ』を読解するなかでエリック・サントナーによって導入された用語で言うなら、これは現在に「はびこる徴候—症候」が有する性質と呼べるものである⁹⁾。ペンヤミンによって西洋（と植民地）の歴史に関する言説を構成する次元として特徴付けられた「均質的で空虚な」直線の時間を粉砕することで、反植民地闘争が導入した力強くラディカルで革新的な断絶が、こうして「縫合されて」しまうのである。

それゆえに、ポストコロニアル状況について語ることは、植民地「以後」に問題を孕みながらやってくる時代を指し示すこと、1885年のベルリンの後を次いでいる未解決の地理を指し示すことなのだ。言い換えれば、それは紙の上に引かれた線の存立が不可能であること、そして地図に対して領域が優位を占めていることに光を当てるということである。決してその地図のせいでは流されてきた、そして今も流され続けている個々の血のしずくを否定することなしにだ。またそれと同時に、ポストコロニアル状況について語ることは、繰り返しであるが、世界の複雑さについて熟考するように求める。それは反植民地闘争のおかげで、いやとりわけ反植民地闘争のおかげで、実際に1つとなってきた世界である。その統一性は、本当に底なしの不平等、あからさまな格差、絶え間ない搾取によって横断され続けているが、また同様に、数々の差異がもたらす革新的空間によっても横断され続けているのだ。

4 ポストコロニアルな差異

差異という言葉によって今日引き受けられている新しい意味に対するこだわりは、また別の面において、ポストコロニアリズムの主題の1つを成立させている。ポストコロニアル批評の様々な軌道にしたがっていけば、「差異」のもつ直に政治的な次元には光を当てられる。そしてまさしくこの政治的な次元こそが、「アイデンティティの政治」という標題の下で近年議論されてきた問いの多くを再考するように迫るのである。簡単に言うと、(物質的・政治的・文化的)差異が辿る様々な軌道が、植民地主義が原因でもう取り返しのつかないほどの逸脱を被ってきたことははっきりしている。つまり、それらの軌道は、暴力によって共同利用されることとなった楽譜の上で自らリサイクルを行うよう強いられてきたということである。言葉を変えれば、私たちは植民地を構成してきた本源的暴力に言及することなくし

て、次のことを思考することはできないということである。それは近代性のこと、その差異についての言説のこと、そして近代性が差異の価値を定義し、正しく位置づけ、「評価する」べく作り上げてきたすべての概念装置のことである。

フランスの人類学者ジョルジュ・バランディエ (Balandier 1969) ——イギリス海峡の向こう岸では、リーチ、グラックマン、そしてマンチェスター学派のすべての社会人類学者からの共鳴を呼んでいた——が、1960年代の末に植民地状況 *situazione coloniale* と定義していたものの意味は、まさしくこれ以外の何ものでもない¹⁰⁾。簡単に言うと、それは民族と人種に関する言説の秩序そのものを生み出した文脈としての植民地主義の絶対的な所与性のことである。したがって、差異についての言説が科学のなかで定着してきた際のカテゴリー、人種、エスニシティ、文化……といったカテゴリーの系譜を辿ろうとするすべての試みが向かう先は、いつもこうした絶対的な起源なのである。フーコーによる近代のエピステーメの仕事の価値を下げると同時に、決して思われているほど無邪気なものではないフーコーの落精度¹¹⁾を埋め合わせもするこの系譜学に対して、「ポストコロニアル研究」がもたらした功績は、端的に決定的なものであると思われる。

もしすでにファノンとマルコム X、そしてこの2人より以前にデュボイスが、植民地支配の経験という具体的な歴史的背景なしでは、「人種」について考えることはできないと論じていたのなら（それから、「問題」として表象され、他者の「目」を通して自己を見るように強えられるという単純な事実によって引き起こされる数々の破壊的な効果、正真正銘の精神分裂症がもたらす効果について調査している。「厄介者あつかいされると、どんな気持ちになるものですか？」）、エドワード・サイード (Said 1978) とヴァレンティン・ムディンベ (Mudimbe 1988) は、「東洋」や「アフリカ」のような概念のなかに結晶化しているこうした言説の真理の体制に光を当てた。そして、ジャン＝ルー・アムセルとエリカ・エムボコロ (Amselle e M' Bkolo 1985) の仕事は、「民族」というカテゴリー（少なくとも、それは人類学の言説にとって中心的なものである）の政治的かつ「統治上の」起源を植民地経験のなかに発見していた。その起源は、数多くのポストコロニアルな緊張が有する特徴、それがもたらされた理由として「必然性」を説明するべく、それが不断に繰り返される自然さによって今日では覆い隠されている。他方で、アルジュン・アパデュライ (Appadurai

1996) は、階層化の手続きと搾取の装置の間の直接的なつながりに光を当てた。そのつながりの要因を、植民地の分有の統計化戦略へと結びつけるならば、暦つまり時間の社会的組織化でさえもが植民地の分有から自由であるとは考えられないのである。

しかし、ポストコロニアル研究は、「差異」と植民地主義が明らかに密接な関係にあるということを繰り返すだけにはとどまらない。たとえもし多くのポストコロニアル批評家たちが、植民地主義自体を構成してきた文化的かかわりを再読し、ポストコロニアルへの移行に関して主流となっている物語を脱構築することに献身してきたとしても、かれらが分析を行う対象こそが、かれらを「以後」へと、植民地という原型を「グローバル」な規模で境界侵犯する場へと移動させている。したがって、現在を見つめることによって、ポストコロニアル批評のより多大な理論的努力は、現代のグローバルな舞台のなかで諸々の差異が引き受ける直に政治的な特徴を把握しようとするより複雑な試みへと吸い込まれてくるのである。具体的に言うなら、多くの分析は、縫合や代補といった論理に基づき、植民地の公式言説の行間で作用していたアボリアや変形について考察することによって、差異の表出に含意された数々の具体的な——しばしば意図的ではない——「戦略」を判読することに捧げられているのである——とりわけ、ガヤトリ・スピヴァクによって仕上げられてきたデリダ流のいくつかのカテゴリーが用いられている。

言うなれば、こうした着想は、アイデンティティをめぐる様々な形態や実践に関連している。それらは、進行状態にある一連の横滑りを通して自らをプロセスとして定義し続ける。この横滑りは、濫喩というレトリックのスタイル（文字通り、それがそのようなものとしてはまったく感じられないほどにごく一般に用いられことになったメタファーである。それは意味作用の過程を消尽するのではなく、その過程を拡張し混乱させる。たとえば、テーブルの「脚」のような表現にみられる）として述べられる論理に沿って展開される。また、それらアイデンティティの形態や実践は、本質主義と融合のどちらについてのあらゆる単純で無邪気なイメージに対抗し、弁証法的総合に達することなしに、植民地がもたらす分極化の裂け目に入り込むのである。

差異は、その言説の構築と同様にその物質的な様相のなかでも、本質的に政治的な次元、そしてプロセスとしての次元を有している。この自覚が、ジェンダーの思想についての省察のなかの、また西洋の

いくつかの古典が有する抽象的普遍性に対するフェミニズムの批判のなかの数々のもっとも重要な展開と遭遇しているのは偶然ではない。この段において、あらゆる二項対立の論理、潜在的に絶対的なあらゆる言説、あるいは絶対化するあらゆる言説を「全体として脱中心化する」その能力によって、ポストコロニアル・フェミニズム思想には、ひとつの横断的な政治的変形が授けられている。その変形というのは、フェミニズムとポストコロニアリズムの双方の差異についての言説を問題化し豊かにするものである。チャンドラ・タルパデ・モハンティ、アーニャ・ルーンバ、そして他のポストコロニアル・フェミニストたちの仕事は、とりわけ「第三世界の女性」の神話という抑圧的な「静態」的パラダイムに抗うものであった。このパラダイムは、反植民地ナショナリズムのなかでも、多くの西洋フェミニズムのなかでも決定的な役割を果たしてきたものである。彼女たちの仕事は、差異、つまるところ「人種・文化・ジェンダーの差異を、次のような解釈で把握するように促している。それは、差異が横に並べられたり上下の関係で配置されたりするだけではなく、相互に作用し影響を及ぼし合うものであるという解釈である。差異は、セグリゲーションや服従の新たな比類のない形態を生産するがそれと同様に、差異をめぐる数々の新しい実践、家父長制・人種主義・搾取への抵抗をもたらす新しい実践をも生産するのだ。この差異の相互作用という観点に立つと、ジェンダーをめぐる経験のなかには、決して複製することのできない次元、再生することができない「声」があることがわかる。それらはこういうものとして体系的に消去されてしまうか、情け容赦なく欠如しているものとして表象されてきた（本質的には、これこそがスピヴァクがサバルタン・スタディーズのある種の素朴さに抗して1988年に批判的介入を行った際の問いかけ——「サバルタンは語るることができるか」——に含意されていた回答である）。このような声の除去は、今も持続しているように思われるし、サティ（インドの未亡人の慣例的な自己犠牲）、ヴェール（Rivera 2005 参照）、性器縫合（Pasquinelli 2007 参照）についての諸々の議論の特徴となっている。権力の「伝統的」な実践は果てしなく続く「文化間の対話」を開始するようになった——何の必然性もないのに、それらは「メトロポール」の空間の内部に限定されている。しかしながら、ラタ・マニ（Mani 1998）がはっきりと強調したように、そこで女性たちが見せびらかしの存在ではないときは、彼女たちは最低でも単なる「場所」に過ぎなかった

のである。つまり、いつも彼女たちは主体ではなかった。もし支配的な言説の秩序から逃れて、それを破壊することができなければ。

それゆえに、ポストコロニアル批評によって提起された差異の観念が極めて豊かな理論の見通しとして成功しているのは、まさしく植民地支配とその引き続く影響による徹底的な刷り込みを受けてきたこれらの動態的な前提（グレゴリー・ベイトソン（Bateson 1972, pp. 101 ss.）がかつて「分裂発生」、つまり差異によって生産される差異として定義していたものに等しい）が生み出されて以降のことである。近代の相対主義の言説とそれが有するこのところの政治的様相、それは多文化主義に関わるものであるが、私たちに言わせれば、こうしたことはこれらの動態的な前提によって実質的には乗り越えられているということが告げられているのである。実際、差異の観念がどれくらい同質化への欲動を回避しうる可能性を示唆してくれているのかは明々白々だ。ただ単に、いやむしろ「規範的」な意味においてではなく、分析的観点からにおいてもまたそうなのだ。言うならば、世界の「西洋化」や「コカ・コロニゼーション」についてのあらゆる痛ましいレトリックに抗して、ポストコロニアル批評は途絶えることなく差異を生み出し続ける孵卵器としてのグローバルな現在を主張するのだ。またそれと同時に、こうした差異が有する消去不可能な植民地という原型に対して絶えずこだわることを通じて、ポストコロニアル批評はあらゆる文化の真正性をきっぱりと否定する。それは、エドワード・サイードとジェイムズ・クリフォードによって「救済の対称性^{シンメトリー}」と定義された論理に基づいて起源というものを設定するあらゆる企てに異議を申し立てるのだ。

したがって、多文化主義についての議論、少なくともイタリアの議論のなかで急速に広まりをみせる本質主義に直面するとき、混血・融合・異種混濁性といったカテゴリーに対するポストコロニアル批評のこだわりは、プラスの価値をもたらすさわやかな風を生み出すのである。しかしながら、すでに述べたように、これらの概念によって構成されている意味の領域は、示唆に富んでいるのと同じくらい、潜在的には危険なものであることが表面化している。ここでは、一方でのハートとネグリの批判、他方でのジジェクの批判というのは、その兆候を現実にとらえている。抑圧的なしばりや単一の所属への束縛から解放されたものとして、流動する差異をしばしば賛美にあふれた文体で表象する傾向、すなわち異種混濁性というのは、口には出されないが後期資本

主義がもたらす新しい主体性のなかに、含まれたものなのではないだろうか？ その一方で、差異、つまり一人称で語る権利を強調することは、実際には誰も否定したいと欲してもいないし、繰り返し力づくで復元されてきた「差異への権利」の要求のなかに翻訳されてしまっていないだろうか？

本質的に、こうした危険というのは、想像にあふれた言説のレベル、記憶のレベルを、現実の緊張や闘争に対して投影してしまうという抑圧に関わるものである。抑圧はこうすることで、それらの間に二重の隔たりを再生産してしまうのである。1つは時間的隔たりである。というのは、それが偶発性が勝利を収めるということを断言しているからである。もう1つは空間的隔たりである。というのは、抑圧が実体化された差異を切り離してしまうからである。要するに、差異についてのポストコロニアル批評の賞賛は、資本主義による現実的抽象の支配によって構築された現在が有する〈現実的なこと〉を覆い隠すことで、そこでの「隔たりを保持する」ことになる。つまるところ、これがジジェクの批判である。またとりわけ、多くのポストコロニアル研究がほのめかし復活させている数多のローカルな歴史、「脱中心化された筋立て」のもつ「真理」へのこだわりについて考えてみると、これが直接的な攻撃であることがわかる。しかし、ジェジェクが無視していると思われる問題がある（事実、ジジェクの議論を広範囲に渡って反復することで展開されるピーター・ホールワードのポストコロニアリズム批判は、解放の実践を登録できる唯一の地平として、国民国家の内部を再び提案することになる危険がある）。それは、一般的に言うところの反植民地主義においても、また特殊なレベルで言うところのポストコロニアル批評においても、賭け金はまったくローカルなものではありえないということだ。そうではなく、それが必然的なことであろうが選んだことであろうが、賭け金はすぐさまグローバルなものであり、必然的にそして矛盾を孕んだ「普遍的なもの」なのである。問題となるのは、アプリアナ（抽象的）普遍性ではない。そうではなく、支配と搾取に共通する言説としての植民地の暴力によって課せられてきた具体的な普遍性なのだ。

さて、数多のローカルな歴史へのこだわりがなされるその背後では、より一般的な主題がその姿を見せている。それは、資本の現実的抽象が自らの支配を強要してきた歴史の差異、つまりは時間の複数性をめぐる主題である。資本の現実的抽象は、植民地主義を用いて至るところで「段階」によって織り

なされた連年のなかに時間を配置してきたのである。そしてそれはポストコロニアルな現在においては、暴力的にそれらの時間に共時性をもたせているのだ。実際、ちょうど私たちの現在のなかで歴史的時間が有する性質について考えることによってこそ、ポストコロニアリズムの概念がもたらすまた別の決定的な価値が生まれるようになるというわけなのだ。

5 現在を把握する

この観点からすれば、私たちの現在が「ポスト」をインフレ的に用いることで自らを定義するようにみえる実質的な理由について、それほど突飛なものではない仮説を進めることができる。「ポスト歴史的」という状況については、パオロ・ヴィルノ（Virno 1999）によって定式化されたテーゼをとりあげて展開させてみよう。ヴィルノによると、「ポスト歴史的」状況とは、「大文字の歴史 *Storia* というものを可能としていた条件そのものが見えるようになる」状況のことである。あるいは、時系列的な経過、時間的秩序、そして生成の可能性を基礎づける潜勢力と現勢力との間の緊張が、現象の背後で作用することをやめて、現象のはっきりとした仕組みを構成するようになる状況である。

ラインハルト・コゼレック（Koselleck 1997 e 2000）によって提出されたカテゴリーの助けを借りて、ヴィルノの考察を翻訳してみよう。コゼレックの近代性についての分析の概括的な要点はよく知られたものである。彼によると、近代性を定義するのは、時間の加速化という経験である。その根拠は、大文字の歴史という「集団的単数」へと諸々の伝統的な歴史の複数性を還元するという起源の振る舞いを通して哲学的に表現されているのである。この還元から帰結する時間のベクトルは、一方向性と直線性という性質を結果的に引き受けることになる。そしてこうした性質に対して、「予知の地平」と「経験の空間」の間の緊張関係が移植されることになる。形式的観点からすれば、この緊張関係はヴィルノの言説において潜勢力と現勢力の間の緊張関係が占めている場所と同じところに位置している。コゼレックによれば、ここにおいてこそ、諸々の政治のカテゴリーを時間化する運動の起源に立ち会うことになるのである。それらは、進歩という概念のなかに自らにまとまりをもたらす暗号を見出しているカテゴリーのことである。

ポストコロニアル批評が介入するのは、まさしくこの点に対してなのだ。一方では、それは過去へと向けられた身振りをもって介入する。もし望まれるならそれは伝統的な身振りだろう。もう少しよく言えば、その身振りは、植民地支配の非弁証法的な無言の暴力がもたらす隷属に関するひとつの過去 *un passato* へと向けられている。予知の秩序のなかではあらゆる代償をもって自らを否定し、亡霊を現在へと住まわせることで、大文字の歴史における過去 *il passato* へと引き渡されてしまうことに執拗に抵抗する過去である。他方では、ポストコロニアル批評は、たとえば『ヨーロッパを地方化する』のなかでディペシュ・チャクラバルティ（Chakrabarty 2000）が提起したように、「歴史主義」を批判することをもって、この現在そのものに介入する。こうした批判は、グローバルな時間を構成する諸々の層を時系列的に秩序付けるという可能性自体に対して向けられている。ここではまた別の言い方もしてこう。つまり、資本の世界が形成される過程で、資本と出会い、資本に組み入れられ、資本によってなぎ倒されてきたはずの複数の歴史が、表の舞台に絶え間なく出現するよう仕向けているのは、資本がその大文字の歴史、ベンヤミンが語っていた「均質的で空虚な」時間性を構築する（構築するよう強いられてきた）際のやり方そのものであるということだ。

この観点からすれば、「ポスト」の時代というのは、もちろん支配と搾取が消え去ってしまう時代などではない。そうではなく、時代が変容する際の特権的な場所を突き止めるという可能性自体が宙吊りにされるようにみえる時代である（私たちには、これこそが脱中心化に対するポストコロニアルのこだわりがもつ究極的な意味であるように思われる）。またその一方で、所定の状況の「後進性」や「前進」についてのあらゆる判断が地方化される。これは、ただ現在のなかでのみ、その効果的な判断基準を見いだしようという意味においてそうなのである。

この点に関しては、長期間に渡って展開されてきたある理論的作業が、重要な役割を果たしている。それは思想的に異質な数々の伝統が寄与してきた作業であるが、そこで関心が向けられてきたのは、「西洋」の外部での移行 *transizione* というカテゴリーに対してである（本書の第6章と補遺を参照）。資本主義への移行という直線的なイメージを通して植民地主義を解釈してきた分析モデルは敗北を喫してきた。それだけではなく、「不均等発展」や「従属」のようなカテゴリーにはじまり、「発展」、「市民権」、「賃労働」のようなカテゴリーに想定された進歩的

徳性を基軸に据えてきた数多の政治的企図もまた敗北を喫してきた。しかし、歴史的時間の複数性が同時に存在するなかにこそ、すなわち様々な支配のかたちと解放の実践が同時に存在するなかにこそ、西洋の外部で資本主義が有した構造的特徴を突き止めるよう私たちを仕向けるのは、何よりこの敗北なのである。そして、この特徴はかつて「メトロポール」と定義されていた空間のなかに浸透し、今日ではグローバルなスケールで力を増大させているのだ。

したがって、チャクラバルティが語る「ヨーロッパの地方化」は、二重の意味で重要な役割を果たしている。一方ではそれは、ヨーロッパの（あるいは「西洋」の）資本主義の経験がどれほど独特なものであり、一般化のできないものであるのかということを示している。ヤン・ムーリエ・ブータン (Moulier Boutang 1998) が用いる言葉を借りれば、それは世界システムとしての史的資本主義が形成される際には、どれほど労働支配の「ゆがんだかたち」の存在が顕著なものであるのかということを示しているのである。他方ではそれは、「世界の西洋化」が実現されるように思われるまさにそのときに、決定的にヨーロッパ（「西洋」）を一地方 *una provincia* へと変えてしまう。なぜなら、ヨーロッパの境界が「多孔的」であるから、そしてその境界を横断して、数々の「植民地」の暗号が自らを「中心」として考え続けているものの内部へと浸透してくるからなのである。

これこそが、ポストコロニアル批評から引き出すことのできる現在のイメージであるように私たちには思われる。現在とは、近代資本主義がその行程のなかで出会ってきた数々の過去の全体が、一種の「万国博覧会」のなかで無秩序なかたちで再び現れてくる時代、ひとつの直線的な傾向を定義できるところではなく、「資本のもとへの労働の形式的包摂」と「実質的包摂」が「異種混淆」し合い、並んで共存する時代なのである。いったん植民地の境界によってグローバルな地理が理路整然と組織立てられるのをやめてからは、境界は潜在的には至るところへ拡散し、グローバルな現在の一面「平滑」な表面上で再生産されているのである。その境界は、生産を脱局在化する新しい論理を備えている。その境界は、かつて植民地の圧制からは解放されたが、今日では反植民地闘争のもたらした数々の失敗に対峙するよう強いられる社会全体に乱暴なやり方で傷跡を残している。その境界は、ポストコロニアルな西洋の中へ、地位に関して設けられた数々の新しい根源的な差異、そして数々のアパルトヘイトの

新たな形態を引き入れている。その境界は物理的に要塞化されている。ティファナとサンディエゴの間の囲いを越えて、あるいは地中海を遭難して、越境しようと試みるあらゆる人に潜在的には死刑の宣告を行っている。

ちょうどよく似た差異の論理が、西洋の資本によって強要され翻訳されている。それは、融合に関する言語を語ることのできる差異である（ジジェクもハートとネグリも強調していたように）。つまり、この惑星上に広がる様々な生のかたちに対して、一定のかたちをした共時性（市場というかたちの共時性）を与える準備を十全に施しているのである。まさしくこれこそが、後期資本主義の語彙のなかで、平等がもっとも扇動的でもっともとんでもない言葉であり続けている理由なのだ。支配と搾取をもたらす新しい境界、新しい装置が、諸々の差異を働かせるために機能していることをいったん認めれば、私たちは次のことも認めなければならない。それは、これらの境界や装置と闘う女性たちと男性たち、あるいはその境界や装置の影響が広がりをもせる圏域からは逃れながら、ただ自らの生を構築している女性たちと男性たちの様々な実践によって、それらは毎日のように挑戦されているということだ。今日では、解放の可能性が歴史の必然的法則という秘密の作用へとゆだねられることをやめている。なぜなら、還元不可能な多数性を生きながらこの惑星に住まう女性たちと男性たちの実践へとそれは託されているからである。そこから、普遍的なものの（平等の）言語もまた、異種混淆したものとして、混血したものとして出現するようになる。重要なことはこうだ。あらゆるレトリックを越えたところで、マルチチュードの政治がはっきりと表明されうる共通のものから織りなされる楽譜として、普遍的なものの言語を日々構想するということである。

注

- 1) リチャード・バックスターの引用は、ウェーバーのなかにある (Weber 1904-1905, p. 305)。レイ・チョウ (Chow 2002) は最近の本『プロテスタンティズムのエスニックなものと資本主義の精神』のなかで、ポストコロニアルの文脈でウェーバーの古典を再読する独自の観点を提供している。特に、それは現在における「エスニック」なレトリックが遍在する文脈に対してである。
- 2) サイド (Said 1993) もトーマス (Thomas 1994) もこの点を強調している。
- 3) エティエンヌ・バリバルは、世界というものに関する

- 新しい概念が出現する状況を私たちは今日経験していると主張している。歴史上はじめて、抽象的な理想よりも「人間性」が「個人そのものを存在させる条件」(Balibar 1997, p. 430)を形成しているのである。
- 4) この批判を仕掛けているのは、アリフ・ダーリックだけではない。この点をめぐる議論に関しては、マクリントック (McClintock 1992) とショハト (Shohat 1992) を参照。よりラディカルなやり方では、サン・フアン・ジュニア (San Juan Jr. 1998) はアフマドのテーゼを展開させることで、ポストコロニアル批評が目指している時間の宙吊りのなかに、真正銘の歴史の否定を認めている。
- 5) セゼールのくだりは省略なしで引用するに値する。「そうだ、ヒトラーとナチズムのやり方は、臨床的かつ詳細に研究する価値がある。そして、優雅にして人道主義的かつ篤信家の二十世紀のブルジョワに教えてやるのだ。彼の中には、まだ自らの本性に気づいていないヒトラーがいる。彼にはヒトラーが宿っている。ヒトラーは彼の守護霊である。彼がヒトラーを罵倒するのは筋が通らない。結局のところ、彼が赦さないのは(……)人間に対する辱めそれ自体ではなく、白人に対する罪、白人に対する辱めなのであり、それまでアルジェリアのアラブ人、インドの苦力、^{クワリー}アフリカのニグロにしか使われなかった植民地主義的やり方をヨーロッパに適用したことなのである」(Césaire 1955, p. 12)。
- 6) 「ヨーロッパのキリスト教文明が、世界を支配するべく生まれてきた優秀な人種の名の下に、世界のあらゆる場所では有色の人民たちに対して行ってきたこと。それはナチズムの残虐行為——強制収容所、大衆へ暴力と虐殺、女性への冒瀆、幼児への恐ろしい辱め——以外のなにもでもない」(Du Bois 1946, p. 23)。
- 7) この点について、近年クリスティアン・パレンティはこう述べていた。「指紋押印は文字通り、植民地という周辺から世界システムの中心へと移動する。アメリカでは、指紋押印を一斉に実行された最初の人たちというのは、囚人たち、軽微な罪を犯した犯罪者たち、兵士たち、ネイティブ・アメリカンたちであった」(Parenti 2003, p. 49)。
- 8) 『新植民地主義——帝国主義の最終段階』(初版は1965年にさかのぼる)というエンクルマの本について論じるなかで、ロバート・ヤングは的確にこう述べていた。「ネオコロニアルなかたちで支配が連続することをエンクルマは強調している。だがそれはしまいには、独立によって勝ち取られたものを低く見積もるような力の無さと受動性の観念を示唆してしまうという短所を呈している。そこには、独立闘争を行ってきた運動自体もまた含まれるのだ。それはたとえ共感を含意するものであるとしても、無力さをめぐる数々のステレオタイプを存続させてしまひ、同質的な永遠の犠牲者として描かれる第三世界に対する西洋のヘゲモニーという前提を強化してしまうのである……ひとつの概念としての新植民地主義は、それが描き出している条件と同じくらい力を奪い去ってしまうものなのだ」(Young 2001, p. 48 s.)。

- 9) 「徴候—症候は、過去における失敗した革命の試みだけでなく、より控えめに言っても、行為の喚起、さらにはそれがその一部となっている生の形態にある意味で属している苦しみに苛まれている人びとに成り代わって共感を喚起することへの呼応に過去において失敗したことを登録している。そうした徴候—症候は、ここにある、われわれの生において主張する、何ものかを、それが完全なる存在論的一貫性を決して獲得しないまでも、捉えて放さない。こうして徴候—症候とは、ある意味で、歴史的経験において潰えたさまざまな空の仮想的なアルヒーフ——あるいはむしろ、さまざまな空に対する防衛と言った方がよいのかもしれない」(E. Santner, *Miracles Happen*, Žižek 2002, p. 76)。
- 10) ポストコロニアル研究についてのフランス語の本のために最近書かれた序文のなかで、バランディエは——過度の慎重さや批判的考察にもかかわらず——現在を把握するこれらの研究によってもたらされた功績について申し分のない理解を見せている。彼はこう書いている。「ポストコロニアルというのは、事実上、同時代のすべての人が生きる状況のことである。様々に異なったかたちではあるが、私たちはみなポストコロニアル状況にいるのだ」(Balandier 2007, p. 24)。
- 11) フーコーのなかには、植民地経験を除去する作用があるとはっきり言えよう。これは、彼によってみごとに再構築された近代的主体の創出過程が有する暗い側面である。この意義についてはチャタジー (Chatterjee 1983)、サイード (Said 1986)、スピヴァク (Spivak 1988)、ストーラー (Stoler 1995) を参照。

文献

- Adorno, Th.W. 1951, *Minima Moralia. Meditazioni della vita offesa*, trad. it. Einaudi, Torino 1979. [アドルノ (三光長治訳) 『ミニマ・モラリア——傷ついた生活裡の省察』法政大学出版局, 2009 年]
- Amselle, J.L., E. M'Bokolo 1985, *Au cœur de l'ethnie. Ethnies, tribalisme et État en Afrique*, La Découverte & Syros, Paris 1999.
- Appadurai, A. 1986, *Modernità in polvere*, trad. it. Meltemi, Roma 2001. [アパデュライ (門田健一訳) 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』平凡社, 2004 年]
- Bateson, G. 1972, *Verso un'ecologia della mente*, trad. it. Adelphi, Milano 1976. [ベイトソン (佐藤良明訳) 『精神の生態学』(改訂第2版) 新思泉社, 2002 年]
- Balibar, É. 1997, *La paura delle masse: politica e filosofia prima e dopo Marx*, trad. it. Milano, Mimesis, 2001.
- Balandier, G. 1969, *Antropologia politica*, trad. it. Armando, Roma 2000. [バランディエ (中原喜一郎訳) 『政治人類学』合同出版, 1971 年]
- Balandier, G. 2007, *Préface*, in M.-C. Smouts (a cura di), *La situation postcoloniale*, Sciences Po, Paris.

- Césaire, A. 1955, *Discours sur le colonialisme*, Présence Africaine, Paris-Dakar. [セゼール (砂野幸稔訳) 『帰郷ノート・植民地主義論』平凡社, 1997 年]
- Chakrabarty, D. 2000, *Provincializzare l' Europa*, trad. it. Meltemi, Roma, 2004.
- Chatterjee, P. 1983, "More on Modes of Power and Peasantry", in *Subaltern Studies*, 2 (a cura di R. Guha), Oxford University Press, Delhi.
- Chatterjee, P. 1986, *Nationalist Thought and the Colonial World. A Derivative Discourse*, Zed Press, London.
- Chatterjee, P. 2004, *Oltre la cittadinanza*, trad. it. a cura di S. Mezzadra, Meltemi, Roma 2006.
- Chevalier, L. 1958, *Classi lavoratrici e classi pericolose. Parigi nella rivoluzione industriale*, trad. it. Laterza, Roma-Bari 1976. [シュヴァリエ (喜安 朗・木下賢一・相良匡俊訳) 『労働階級と危険な階級——19 世紀前半のパリ』みすず書房, 1993 年]
- Chow, R. 2002, *The Protestant Ethnic and the Spirit of Capitalism*, Columbia University Press, New York.
- Chrisman, L., B. Parry (a cura di) 2000, *The Postcolonial Theory and Criticism*, D.S. Brewer, Woodbridge, Suffolk-Rochester, N.Y.
- Clifford, J. 1988, *I frutti puri impazziscono. Etnografia, cultura e arte nel XX secolo*, trad. it. Bollati Boringhieri, Torino 1993. [クリフォード (太田好信・慶田勝彦・清水 展・浜本 満・古谷嘉章・星埜守之訳) 『文化の窮状——20 世紀の民族史, 文学, 芸術』人文書院, 2003 年]
- Desai, A. 2002, *Noi siamo i poveri. Lotte comunitarie nel nuovo apartheid*, trad. it. DeriveApprodi, Roma 2003.
- Diner, D. 1999, *Raccontare il Novecento: una storia politica*, trad. it. Garzanti, Milano 2001.
- Dirlik, A. 1997, *The Postcolonial Aura*, Westview Press, Boulder.
- Dirlik, A. 2000, *Postmodernity's Histories. The Past as Legacy and Project*, Rowman & Littlefield, Lanham.
- Du Bois, W.E.B. 1946, *The Modern World and Africa*, An enlarged edition, with new writings on Africa by W.E.B. Du Bois, 1955-1961, International Publishers, New York 1992.
- Fanon, F. 1952, *Pelle nera, maschere bianche*, trad. it. Tropea, Milano 1996. [ファノン (海老坂武・加藤晴久訳) 『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房, 1998 年]
- Fanon, F. 1961, *I dannati della terra*, trad. it. Comunità, Torino 2000. [ファノン (鈴木道彦・浦野衣子訳) 『地に呪われた者』みすず書房, 1996 年]
- Gilroy, P. 1993, *The Black Atlantic. L' identità nera tra modernità e doppia coscienza*, trad. it. Meltemi, Roma 2003. [ギルロイ (上野俊哉・鈴木慎一郎・毛利嘉孝訳) 『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』月曜社, 2006 年]
- Ginzburg, C. 1979, "Spie. Radici di un paradigma indiziario", in ID., *Miti, emblemi, spie. Morfologia e storia*, Einaudi, Torino 1986. [ギンズブルク 「徴候」, ギンズブルク (竹山博英訳) 『神話・寓意・徴候』せりか書房, 1988 年]
- Guha, R., G.Ch. Spivak 2002, *Subaltern Studies. Modernità e (post)colonialismo*, a cura di S. Mezzadra, ombre corte, Verona.
- Hallward, P. 2001, *Absolutely Postcolonial. Writing between the Singular and the Specific*, Manchester University Press, Manchester-New York.
- Hardt, M., A. Negri 2000, *Impero. Il nuovo ordine della globalizzazione*, trad. it. Rizzoli, Milano 2002. [ネグリ・ハート (水嶋一憲・酒井隆史・浜 邦彦・吉田俊実訳) 『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社, 2003 年]
- Kelly, R.D.G. 2002, *Freedom Dreams. The Black Radical Imagination*, Beacon Press, Boston.
- Koselleck, R. 1979, *Futuro passato. Per una semantica dei tempi storici*, trad. it. Marietti, Genova 1986.
- Koselleck, R. 2000, *Zeitschichten. Studien zur Historik*, Suhrkamp, Frankfurt a.M.
- Loomba, A. 1998, *Colonialism/Postcolonialism*, trad. it. Meltemi, Roma 2000. [ルーンバ (吉原ゆかり訳) 『ポストコロニアル理論入門』松柏社, 2001 年]
- Mani, L. 1998, *Contentious Traditions. The Debate on Sati in Colonial India*, University of California Press, Berkeley.
- McClintock, A. 1992, *The Myth of Progress. Pitfalls of the Term Post-Colonialism*, in "Social Text", 31-32.
- Mezzadra, S. 2006, *Diritto di fuga. Migrazioni, cittadinanza, globalizzazione*, ombre corte, Verona.
- Mohanty, Ch.T. 2003, *Feminism without Borders. Decolonizing Theory, Practicing Solidarity*, Duke University Press, Durham, NC-London.
- Moulier Boutang, Y. 1998, *Dalla schiavitù al lavoro salariato*, trad. it. Manifestolibri, Roma 2002.
- Mudimbe, V.Y. 1988, *L' invenzione dell' Africa*, trad. it. a cura di G. Muzzopappa, Meltemi, Roma.
- Nkrumah, K. 1965, *Neo-Colonialism. The Last Stage of Imperialism*, Panaf, London [エンクルマ (家 正治・松井芳郎訳) 『新植民地主義 (1971 年) (エンクルマ選集)』理論社, 1971 年]
- Parenti, Ch. 2003, *The Soft Cage. Surveillance in America from Slave Passes to the War on Terror*, Basic Books, New York.
- Pasquinelli, C. 2007, *Infibulazione. Il corpo violato*, Meltemi, Roma.
- Rahola, F. 2003, *Zone definitivamente temporanee. I luoghi dell' umanità in eccesso*, ombre corte, Verona.
- Rivera, A. 2005, *La guerra dei simboli: veli postcoloniali e retoriche dell' alterità*, Bari, Dedalo.
- Said, E. 1978, *Orientalismo*, trad. it. Milano, Feltrinelli 1999. [サイード (今沢紀子訳) 『オリエンタリズム』平凡社, 1986 年]
- Said, E. 1986, "Foucault and the Imagination of Power", in

- D. Couzens Hoy (a cura di), *Foucault: A Critical Reader*, Blackwell, Oxford [サイド「フーコーと権力の想像力」, ホイ編 (椎名正博・椎名美智訳) 『フーコー——批判的読解』 国文社, 1990 年]
- Said, E. 1993, *Cultura e imperialismo. Letteratura e consenso nel progetto coloniale dell' Occidente*, trad. it. Gamberetti, Roma 1998. [サイド (大橋洋一訳) 『文化と帝国主義 〈1〉』 みすず書房, 1998 年; サイド (大橋洋一訳) 『文化と帝国主義 〈2〉』 みすず書房, 2001 年]
- San Juan, Jr., E. 1998, *Beyond Postcolonial Theory*, St. Martin's Press, New York.
- Shohat, E. 1992, *Notes on the Postcolonial*, in "Social Text", 31/32.
- Spivak, G.Ch. 1988, "Can the Subaltern Speak?", in L. Grossberg, C. Neilson (a cura di), *Marxism and the Interpretation of Culture*, University of Illinois Press, Urbana. [スピヴァク (上村忠男訳 『サバルタンは語ることができるか』 みすず書房, 1998 年]
- Spivak, G.Ch. 1999, *Critica della ragione postcoloniale. Verso una storia del presente in dissolvenza*, trad. it. Meltemi, Roma 2004. [スピヴァク (上村忠男・本橋哲也訳) 『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』 月曜社, 2003 年]
- Stoler, A.L. 1995, *Race and the Education of Desire: Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*, Duke University Press, Durham, NC-London.
- Thomas, N. 1994, *Colonialism's Culture. Anthropology, Travel and Government*, Princeton University Press, Princeton (NJ).
- Virno, P. 1999, *Il ricordo del presente. Saggio sul tempo storico*, Bollati Boringhieri, Torino.
- Weber, M. 1904-1905, *L'etica protestante e lo spirito del capitalismo*, trad. it. Sansoni, Firenze 1965. [ウェーバー (大塚久雄訳) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波書店, 1989 年]
- Young, R.J.C. 2001, *Postcolonialism. An Historical Introduction*, Blackwell, Oxford-Malden, MA.
- Žižek, S. 1997, *Multiculturalism, or the Cultural Logic of Multinational Capitalism*, in "New Left Review", 225.
- Žižek, S. 2002, *Tredici volte Lenin*, trad. it. Feltrinelli, Milano. [ジジェク (長原 豊訳) 『迫り来る革命——レーニンを繰り返す』 岩波書店, 2005 年]

付記

訳者からの翻訳要望に対応してくれるのみならず、質問に対しても快く返答してくれたサンドロ・メッツァードラに感謝する。なお上記の参考文献に関しては、本論文の2003年版 (Mezzadra, S., F. Rahola 2003, *La condizione postcoloniale, "DeriveApprodi"*, 23, 2003, pp. 7-12) もまた参照した。